

10/08 講義予定

多変数関数の微分：

- ・ 偏微分、合成関数の微分とその応用。
- ・ 全微分、偏微分の順序交換。
- ・ Taylor の定理。
- ・ 極大、極小。

重積分

- ・ 定義。
- ・ 累次積分。
- ・ 応用（面積、体積、重心など）
- ・ 変数変換公式とその応用

2変数の関数：([長瀬・芦野] 7.1, [金子]II 6.1, [小平]II §6.1)

実数の対 (x, y) に対し, 実数 $f(x, y)$ を対応させる規則。

例 $f(x, y) = x + y, xy, e^{-x^2-y^2}, \dots$

式で与えられている必要がないのは1変数のときと同様。

定義域が $\mathbb{R}^2 = \{(x, y) | x, y \in \mathbb{R}\}$ 全体とは限らない。

例 $f(x, y) = \frac{x}{y}, x^y = e^{y \log x}, \dots$

2変数関数の可視化：

まず、定義域について、 \mathbb{R}^2 を平面の点全体の集合と同一視する。

関数のグラフ

$\{(x, y, z) | (x, y) \in \text{定義域}, z = f(x, y)\}$ は空間 \mathbb{R}^3 の部分集合を定める。これを図示しないとイケない。

例：球面の上半分 $z = \sqrt{1 - (x^2 + y^2)}$

平面 $z = ax + by + c$

$z = ax + by + c$ 上の点の位置ベクトル $\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = x \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ a \end{pmatrix} + y \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ b \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ c \end{pmatrix}$

一般の場合： $z = f(x, b), z = f(a, y)$ のグラフをいっぱい書く。

2変数関数の極限： $\lim_{(x,y) \rightarrow (a,b)} f(x, y)$

$\lim_{x \rightarrow a} \left(\lim_{y \rightarrow b} f(x, y) \right)$ や $\lim_{y \rightarrow b} \left(\lim_{x \rightarrow a} f(x, y) \right)$ とは意味が違う。

例： $\lim_{x \rightarrow 0} \left(\lim_{y \rightarrow 0} \frac{xy}{x^2 + y^2} \right) = 0$, $\lim_{y \rightarrow 0} \left(\lim_{x \rightarrow 0} \frac{x^2}{x^2 + y^2} \right) = 0$ 。だが、 $x = y$ として

から $x \rightarrow 0$ とすると、 $\lim_{x \rightarrow 0} \frac{x^2}{2x^2} = \frac{1}{2}$ 。

$x = r \cos \theta, y = r \sin \theta$ とおけば, $\frac{xy}{x^2 + y^2} = \frac{\sin 2\theta}{2}$ 。

$\lim_{(x,y) \rightarrow (a,b)} f(x,y) = A$ とは, $\lim_{r \rightarrow +0} g(r) = 0$ をみたす関数で, $0 < (x-a)^2 + (y-b)^2 \leq r^2$ ならば $|f(x,y) - A| \leq g(r)$ をみたすものをとれること. (ε - δ 論法でいえば, r が δ , $g(r)$ が ε .)

例: $f(x,y) = xy$ のとき. $|xy - ab| = |(x-a)(y-b) + (x-a)b + a(y-b)| \leq |x-a||y-b| + |x-a||b| + |y-b||a| \leq r^2 + (|a| + |b|)r (= g(r))$